異能物対策本部ゴ●ギツネ傍迷惑
卑猥対策課事件簿

夜の世界の綺羅星！ゴールデンフォックス見参！（役立たずエロ要員です）

K

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19443935

R-18, 守エク霊, エク霊, 霊幻受け

Kが書きたいように書いたので推敲も何もありません。
キャラ崩壊ごめんなさい。
先にスライディングして謝っときますね。

あらすじ⤵︎⤵︎⤵︎

調味市に現れる怪奇現象「異能物」。
それらの声を聞き日々駆け巡る、一人の心優しい除霊屋、名をゴールデンフォックス（自称）。
彼が囚われる度に物凄く迷惑そうに助けにやってくる律儀な刑事、吉岡兼エクボ。
何度もﾁﾝ事に遭遇するたびに2人の距離は縮まって…？！
モブおじ歓喜のラッキースケベエロ奇譚（だと思います）
頭空っぽにして読んでください。
文句は神様に言ってください。

以下内容が散らかってますので素足で踏んで刺さりませんように。

霊幻がアホな子（かわいいを目指しました）
エクボがものすごいツッコミ体質（たまにヴォケ）

調味市がもうアホです
オリジナル設定あり
言葉表現が直接的じゃない！（珍しい！）
え、エロくない？！（ぎゃぁぁぁ）

今回は致してないのでエロはないのですが、そういう表現だけありますのでR18にしました。
…やっちまった。

夜の世界の綺羅星！ゴールデンフォックス見参！（役立たずエロ要員です）

「こんなはずじゃなかったって？」
そろり、と黒光りの革の指が頬を撫でる。
「ならどんなつもりだったんだ」
語りながらんふ、と艶のある含み笑いを浮かべるとろりとした乳色の頬と、それを覆う黒革のアイマスク。
「寝ぼけないでくれるか？」
はぁん、と吐息を含ませてその柔らかさをふるりと示す、薄紅の愛らしい唇。
キメ顔でキラリと光を宿し輝かせてのたまう、マスクの奥の蜂蜜色の半目。
「俺はこの夜の世界の綺羅星、ゴールデンフォックス。俺の解決できない事はひとつだって有りはしない！」
ビシィ、とサムズアップを突き出して、バチンとウインクをぶちかますのは、ゴールデンフォックスを名乗る細身の男。全身をテラテラと煌めく、胸元と臍周りが大きく開いた怪しい黒革のボンデージで包み、猫耳のついた大振りのアイマスクで顔を覆う。余裕綽々としてむっふっふと含み笑いをし、自信に満ち溢れた様子で自身の顎を指で撫でている。
「いやテメェその状況で口上述べてんじゃねーよ！」
そこに鋭く突っ込むのは、両頬をまるで化粧のように赤く色付かせ、黒スーツとネクタイをピシリとキメた体躯の良い男。怒りでぷんすこと頭から湯気を吹き出してガチギレしている。
「最初からこんなつもりでしたよ早く降りてこねぇかバカタレ！」
「降りれたらとっくに降りてるよー」
バカなのぉ？と猫のようにうーんと伸びをして白い脇を見せつける不埒な自称ゴールデンフォックスに逆に突っ込まれて、ムキィーと黒スーツの男はブチ切れる。
「なんか変態が！触手に捕まって大変だって親切な市民の皆様から

通報があったから！」
「ほう」
「わざわざ夜中の2時に！」
「うん」
「俺様が！」
「ええー」
「飛び起きて！」
「はぁ」
「この公園に駆けつけてやったんだろうが！！こんのクソゴ●ギツネ！」
「ゴンギ●ネじゃねぇってば！」
そうなのだ。この黒スーツは心優しい市民から通報を受けてわざわざ真夜中の公園に急遽駆けつけてきたのだ。このゴールデンフォックスというセクシー変態を助けるために。寝ぼけたい。というかさっさと帰ってものすごく寝たい。
現にゴールデンフォックスは、どこから湧いて出たのか激しく問いただしたい勢いの赤黒いウネウネとした触手に捕まって、逆さまに宙吊りにされ、ぶらんぶらんと楽しそうに左右にゆったりと揺れているのだった。
そりゃその状態でキメ顔で口上述べられたら誰だってキレるだろう。
「大体なんでまたできもしねー依頼受けてんだ変態ボンデージ野郎！」
「アンッ！だってこの触手が寂しいってぇ！あと衣装似合ってんだろ」
「クッソこいつマジ殴りてえ」
ゴールデンフォックスは、実は怪奇の声が聞こえる変態ボンデージの、心優しい傍迷惑なエロ除霊屋だったのである。本当に迷惑である。ただいま触手から絶賛乳揉みタイムで胸をギチュギチュと揉みしだかれている。
「てかさぁ、あっん、なんで駆けつけ要員が、ぁ、いっつもンッふ、お前なの。飽きた」
「飽きたじゃねぇ！俺様がテメェの担当だからだよチクショォ！」

チェンジ、と指をパチンと鳴らす態度に、額に青筋を立てながら深夜2時過ぎにしては迷惑なテンションでキレ散らかす黒スーツ。
「どうやったらそうなるんだよ！早く降りてこい！」
「だぁから降りれないんだって。ぁん！こいつ離してくれないんだよ」
うんしょ、と腹部にぐるぐると巻きついた触手を押し除けようともがくが、びくともしない。それどころかもっと抱きしめるように圧を強めてきて、ゴールデンフォックスの内股に入り込むそれがぎちゅ、と音を立てて、月の光に煌めく黒革のホットパンツにぬるぬると食い込んでいく。その際にゴールデンフォックスのゴールデンにぐりりと押し当たる。
「あっん！こぉらだめだってばぁ」
語尾にハートマークでも付きそうな勢いの悩ましい声で触手をいなそうとしているが、そんな気概はさらさらなさそうだ。それどころかゴールデンが結構な勢いでぐっちゅぐっちゅと擦られ揉まれて、主人の息が荒く乱れて広い公園に響き渡る。「あん！出ちゃう！」とか言っている。黒スーツはもう呆れるしか無かった。
（ていうかあんなに逆さまなのに頭に血ぃのぼんねぇのか・・・）
黒スーツ、心配するところそこじゃない。
はぁ、と心底嫌そうな溜め息を吐いて、黒スーツが胸に手を入れて銃を取り出す。現れたのはスタームルガーGP100。リボルバー式拳銃だった。それを構えてカチリと激鉄を起こし、やる気なさげに狙いを定めて引き金を引く。
「あ！もぉダメぇ！」
今度は胸のピンクゴールデンをにゅるりと締め付けられて、また甲高い艶めく声を上げるゴールデンフォックスを、気怠さと眠気で撃ち抜かないよう、触手に向かって一発放つ。ガウン！と銃声が深夜の公園に鳴り響いた。
銃口から撃ち出されたのは鉛玉ではなく、眩い光を放つ聖光弾と呼ばれる特殊弾。対異能物戦のために上から配給されている装備だ。
「ぎゃおおあああああ！」
悲鳴を上げながらぐちゅぶちゅと黒煙を上げて消えていく触手。逆さ宙吊りになっていたゴールデンフォックスは、支えをなくして

「あ」と間抜けな声を出し、ドサリと落下する。
「いってぇ！ちょっとー！」
「あぁ？」
銃を仕舞いながら本気で面倒臭そうに欠伸をかます黒スーツに、ゴールデンフォックスがぎゃいぎゃいと喚く。
「大丈夫か？とかキツくなかったか？とかもう俺様の腕でおやすみ★とか言いながら熱く受け止めてくんないのかよ！あともう少しでイけそうだったのに！」
激しく文句だけは一丁前に捲し立てるゴールデンフォックス。名前も長くて口も達者で本当にうるさい。なんだこいつなレベルのやかましさである。しかも絶頂できなかったことを文句言うトンデモだ。次からのこの作品での呼び方もゴ●ギツネでいいだろうか。そして、尻を摩りながらふらりと立ち上がる。が。
「あん！」
バリーン！と派手な音がして彼の着用していた煌めくボンデージが、マスクと手袋とニーハイブーツを残して全て木っ端微塵に破れ去った。なんという傍迷惑なラッキースケベであるか。
「あぁーやだぁ見ないでぇ！」
「見るかよ変態！さっきの触手の粘液にやられたんだろ。早く着替えろ！ジャージくらい持ってきてんだろ」
「ねぇよんなもん。これで家から来たから」
「はぁぁぁ？！」
よく近所のお巡りさんに捕まらなかったものだ。お巡りさん、変態はこちらです。黒スーツは本気で頭が痛くなり、額を抑えた。正直泣きたい。
「テメェのお守りはどうした」
「あ、モブニャンリツニャン？バッカこんな夜中に連れ出すわけねぇだろ。あいつらまだガキだぜ」
青少年保護法な？とビシリと正論を叩きつけてくる。公共施設で革製マスクと手袋とブーツだけの素っ裸の男に法律を語られてもイライラが募るだけである。
黒スーツはイラつきで震える自身を抑えながら、黒のジャケットを脱いでバサリとゴールデンフォックスへぶん投げた。

「それ着てさっさと帰れ！はいおやすみ！」
「えー、送ってってよ」
「はあ？！テメェふざけんのも大概に」
さっさと帰ろうとしていたところで振り返れば、地べたにぺたりと座り込んで、彼ジャケよろしくジャケットをだらしなく羽織り、車止めの銀のポールにしなだれかかってすりすりとその金属を撫で回している。
「・・・襲われちゃう、よ？」
いいの？と不敵な笑みを浮かべて熱い息を漏らすゴールデンフォックス。
「・・・はぁ、っ・・・」
「さいなら」
容赦なく踵を返す黒スーツ。
「ああああごめんなさいごめんなさいエクボ様ごめんなさい！腰抜けて勃起ちんこ恥ずかしくて歩けないから送ってってくださいお願いしますぅぅ！！」
エクボと呼ばれた黒スーツが、諦めたように肩で大きく溜め息を吐く。それはそれはでかい溜め息だった。嫌味とも取れるほどにでかかった。
頭をガリガリと掻いて、あーもう！と怒鳴る。
「ほら、立てるか」
差出される大きく無骨な手。それを取る華奢な黒革の手。
「立てるわけねぇだろ」
「テメェはもっと謙虚さを持て」

味玉県警察署。
味玉県調味市に在するこの警察署には、特殊課が存在する。
その名も、異能物対策本部。
この調味市は、どういうわけか日本国内で随一の異能物と呼ばれる怪奇現象の発現の多さを記録し、もはや日常茶飯事な地域だ。その

ためその対応を取るべく、首都でもないこの地域の県警署内に本部が置かれることとなった。
そして、吉岡守、通称エクボと呼ばれる刑事が配属されているのがこの特殊課である。
特殊課には、単純に異能物を退治する部署と、もう一つ専属部署がある。
それが。
「だぁかぁらぁ！なんで俺様ばっかりこいつのこと追っかけ回さないといけねぇの！」
「あらぁ、仕方ないじゃないの。上からの通達なんだからぁ」
エクボの上司である魔津尾がエクボを宥めにかかる。手をひらりひらりと振って、シールをベタベタと貼り付けた小学生女子の宝の壺みたいな入れ物をスリスリと撫で付ける。
「それともこの壺の中でまたバトルロイヤルしてくる？」
ねぇ、マシュマロちゃん？と囁かれ、チッと舌打ちをするエクボ。
「そん中は2度と御免だ！あと俺様はマシュマロじゃねぇ！」
イライラしながらふかしていた煙草をぐっと携帯灰皿に押しつけた。
「ゴ●ギツネ傍迷惑卑猥対策課ってふざけてんのかよオイ！」

まず説明事項が二つ。
一つ目、エクボは実は悪霊である。本体は緑色の鬼火のような見た目をしており、この吉岡守の肉体に憑依をして仕事をしている。吉岡自身も刑事のため、身分的には全く問題ない。その時々に応じて吉岡メイン、エクボメインと交替をしながらこの業務に日々従事しているのだった。エクボは以前色々あった時にこの異能物対策本部の魔津尾にとっ捕まって壺に閉じ込められ、ペットのマシュマロちゃんとして可愛がられていた時期がある。それを今イジられている、という事だ。

二つ目、ゴ●ギツネ傍迷惑卑猥対策課について。これは昨晩の変態ボンデージの男ゴールデンフォックス（除霊屋）を監視する課である。ゴールデンフォックスという名前が長ったらしくオッサン刑事

どもが口が回らないため、ゴールデンを省略してゴン、フォックスを日本語化してキツネ、読みやすくしたのがゴ●ギツネだった。日本の涙溢れる例の愛らしい狐とは程遠く、ラッキースケベが頻発するために性に飢えた一般オジサン達の格好のエンターテイメントとなっており、彼の出没する先には時間帯関係なくカメラ小僧ならびにカメラオヤジたちの人だかりが出現するようになってしまった。ある意味調味市の不定期開催イベントのようになってしまい、調味市といったらこれ、と面白半分で吹聴する輩が後を絶たない。そして何もオジサン達ばかりではない。調味市内の一部の女性達の間では彼をメインにする創作活動が行われており、毎度彼を助ける吉岡兼エクボ刑事が左か右かで論争を繰り広げ、その創作の集大成を祝うイベントもすでに100回を超えグッズや薄い本が縦横無尽に激しく飛び交うのだった。そんな彼をこれ以上調味市の風物詩のように見られるのは市のプライドが許さないとでもいうのか、この異能物対策本部内にゴールデンフォックス対策としてこの課が設立されたのである。そこに白羽の矢を立てられたのが、吉岡守兼エクボだった、ということなのだ。他に人員はいないのか、だと？そんなのご都合で署内から引っ張って来られる輩が居るにはいるが、ゴールデンフォックスを目の当たりにすると若造は鼻血を吹き出し社会の窓にテントを張り、ベテランは血圧が上がって鼻息荒く犯罪者の仲間入りを果たそうとするためことごとく失敗しているのである。察してほしい。
適任者が今のところ、吉岡兼エクボしかいないのだ。
オタク特有の早口ですまない。本題に戻る。

「まあ、ふざけているようでふざけてはいないかもなんだけど」
「いやどっちなんだよ」
はぁ、と溜め息をついて、魔津尾も困ったように頬に手を当てて笑う。
「だってあなたしかいないんだもの。がんばってもらわないとねぇ」
「人員増やしてくれ。毎度深夜に叩き起こされる身にもなれ。吉岡の身体にも負担がでかいんだぞ」

「わかってるわよーもう。それより、武器の整備とか弾の補充とかちゃんとしてる？市の補償なんだからめいっぱい使ってやんなさいよね」
「言われずとも」
はん、と不満げに鼻を鳴らして、昨晩使用したリボルバー式拳銃を取り出す。漆黒のそれは重々しくゴトリ、と卓上に置かれてごつい銃身を晒す。
「いまどきリボルバーなんて面倒くさいでしょうよ」
「こいつがいちばん手に馴染むんだよ、悪いかよ」
それに、とニヤリと半笑いをするエクボ。
「このシリンダー内の弾数で退治はいつも余るくらいだ」
他にも対異能物処理の武器はあるが、吉岡もエクボもこれが気に入っており、いつも肌身離さず持ち歩いている。咄嗟の判断の時は、一番手慣れたものが対応しやすいというものだ。
「そういえば昨晩もお楽しみだったのよね？報告は？」
「お楽しみじゃねぇよ！ただでさえここエロギツネ課って言われてんだぞ！誤解招くような言い方すんな」
心底嫌そうにひと睨みして、淡々と報告をする。
「深夜2時に市民より通報。調味市内A公園にて触手が発現。異能物レベルE。該当異能物にゴ●ギツネ拘束されるも吉岡にて異能物撃退のため被害なし。以上」
「・・・ほんとに淡々としてるわね」
「これ以上なに話せってんだよ」
「何ってナニよ」
「ねぇわ！」
いや、服が破けてまいっちんぐというくだりはあったが。
「それにしても調味市、発現多いけど、最近さらに増えてきた気がするわね」
「嫌な事言うなよ。そりゃ感じてたけどもよ」
ぎし、と椅子を軋ませてぐるーりと回転するエクボ。特に嫌な予感も心当たりもなかったが、とにかくゴールデンフォックスの傍迷惑さに苦虫を噛み潰したような顔をしたのだった。

「ぶえっきし！」
今時そんなくしゃみをするのかというほどのオッサンのようなくしゃみをする細身の男。窓からブラインド越しに差し込む日光に、日本人にしては明るい亜麻色の頭髪がきらりと光り、昼下がりの日差しの強さを知らせてくる。
「師匠、風邪ですか？」
黒い猫耳の生えた学ランのおかっぱ頭の少年が、湯呑みに入ったお茶をデスクにことりと置きながら言う。
「あーモブ、さんきゅな」
「えへへ」
頭をワシワシと撫でてもらいくすぐったそうに目を細めて笑う少年。その後ろでじとりと睨みつける、同じように黒い猫耳の生えた顔立ちの良いイラついた少年。
「霊幻さん、あんまり兄さんに触るな」
「命令形かよ律ぅ」
口を尖らせて少年を揶揄いながら茶を口に運ぶ。
「っうあっちいぃい！」
極度の猫舌で湯呑みを手放してしまい中身をぶちまけるところを、モブと呼ばれた少年が人差し指で力を操りフヨフヨと浮かせる。無事にデスクの上に置くと、男の側により添い、彼の頭を胸に抱き寄せてその亜麻色の頭に頬をすりすりと擦り付ける。かわいい。デレ猫最高か。
「昨日の夜はお疲れ様でした。ゴールデンフォックス」
「労いありがとうな、モブニャン」
「・・・兄さんにさわ」
「リツニャンもありがとうな」
怒り顔で真っ赤になって俯くリツニャン。とりあえずめっちゃかわいい。ツン猫最高か。
「結局エクボに助けられたんですね。僕たち深夜だからって自宅待機でしたけど」
「んー、まあな。触手がな・・・」

（ソバニイテ・・・オカアサン・・・）
あの時の触手の声がまた思い出される。いや、オカアサンってなんだ。それにしても切ない声で泣かれるものだからもういいやなんて思ってたところにあの野郎、聖光弾なんかぶち込みやがって、と脳内でぐるぐると悪態を吐く。
「お前らマジカルリリカル的なアレで実年齢100歳超えてるけど、この世界での見た目は14歳だからな。俺が捕まる」
はぁー、とため息をつきながら手元の新聞を見る。記事には『今日のゴールデンフォックス！』と題してなんか適当な記事をこさえて変な事になっている。夢小説か。
「衣装が破けて寒かったからな」
「あんなほとんど着てないようなのでもですか」
「律、あれは着てるの」
「マッパで帰ってきた時は本当に驚きました。さっさと捕まればいいのに」
「マッパじゃない。手袋とマスクとブーツはあった」
とりあえず、とその男は茶を啜る。
「この霊幻新隆がなんとかできるうちはやんなきゃな」
「そうですね。せいぜい捕まらないように頑張ってくださいね」
「リツニャンかわいい」
「うっぐ」
律はとりあえずかわいいと言っておくと顔を真っ赤にして押し黙るので、それがかわいいのでいつもやっている。いじめっ子か。

霊幻新隆。
この男が、昨晩のゴールデンフォックスを名乗る除霊屋だ。
いきなり正体バラすのやめてもらえませんかとかそういうのはナシだ。文字数抑えたいから。
そして彼が侍らすのが、モブニャンとリツニャンだ。彼らは霊幻に従う霊的存在なのだが、人間を体験したいと実家を飛び出して現世で中学生を満喫中である。普段は猫耳と尻尾をしまいこみ、普通の男子中学生として青春を謳歌している。モブニャンが影山茂夫、リツニャンが影山律として人間に紛れ込み、日々の生活を送ってい

る。
霊幻は昼間は調味市内某所で「異能とか相談所」を開き、破格の値段で相談を受け付ける萬屋のような仕事をしている。主にマッサージなのだが本人曰く異能除去らしい。マッサージの顧客は老若男女、と言いたいところだが、どういうわけかオジサンが多い。なんでだろうな（白目）。

「・・・ふ」
ぞわり、とうなじに鳥肌が立つ。どうやらまた異能物の気配がするようだ。
「今夜も楽しくなりそうだぜ・・・」
クックックと低く笑う霊幻。
「何もできないくせに」
「リツニャンかわいい」
「はぅん！」
顔を真っ赤にしてぐぬぬと押し黙るリツニャン。
霊幻はふ、と口角を上げて、ブラインドから空を見上げるのだった。